

小學校教科用書

三學堂小學讀本

明治二十年五月 文部省編輯局

尋常小學校讀本卷之一

十目 次

學 校

咲け花よ

妹の姉をえんせつにする話

猿とかにせの話

人形の舟遊び

かたつぶり

(一章)

(二章)

時計 (二章)

はなれ馬

心はたけのうた

富士山

考へ物

食物 15

子をあひする猫の話

紙 17

小猫の話
慾深き犬の話

兵士 20

新聞賣

海岸の遊びの歌

八町三郎の話 24

日の出

なみねの歌

(二章)

方角

舟遊び

山びら

かすみか雲かの歌

(三三三)

雲の海

雲の海

雲の海



五等 學校
 五等は、さふぬんの春
 より、學校へ入れり。
 そして、まいあそ早し
 學校へ行き、せん
 きやうして色々の

第一課

尋常小學讀本卷之二

小學校教科用書

尋常小學讀本

明治二十年五月 文部省編輯局

尋常小學讀本卷之三

目次

正直もの

まさと

かひさ

二郎のおもしろを染めたる話 (二章)

米

道長の話

(二章)

おきよと正雄との話

久くら

塙保巳一の話

次郎と三郎との話

九年母の話

えりぬすみ

正作病氣になりー話

はねそーみせー馬の話

正雄の正直

馬

馬の重を助けー話

四季

酒井忠勝の話

作太郎の鳩

作太郎の手紙

桑つみ女

招魂社

行成と實力との話

かうまんなる男

虎と狐との話

燕

燕の巢を奪ひし雀の話

尋常小學讀本卷之三

第一課

正直もの

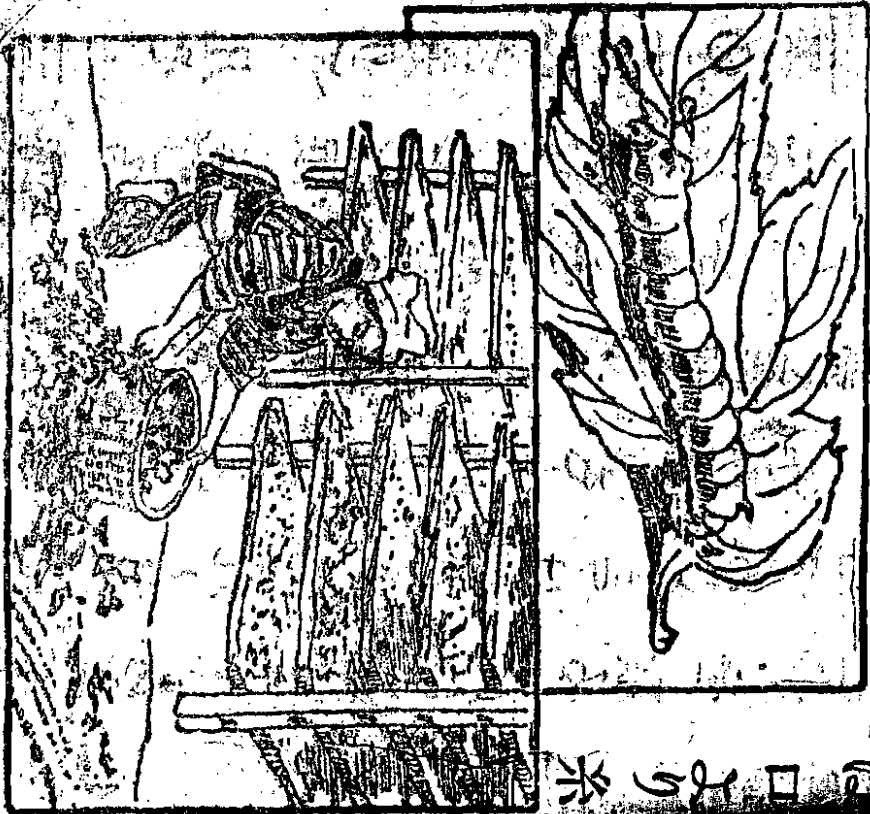
松平丹後守といふ大名に、つかへたる小坊主
有り。ある朝、さうちを思ひから、簾にて
やりをつかふまねをなさ、に、あままりて
丹後守が、ひさうの松の枝を打ち折りたり。
小坊主も大にこいて、此事、丹後守に知れ

めいへの 捉 聴れすて
 誠の道を守る ズイ
 詐道 安明 捉 出

第三課 かくし 道の中へ

かひしは 蛾の卵より かくりて 小れか はたか
 虫と かり 桑の葉を 食ひて 成長に 十分
 成長 かくりて 桑の葉のはを へそぬ ずうに

を 出 け
 かへ 糸を
 出 け
 まめと
 みる 巢
 を け
 ため かり



かぢ者は此巢の中にさまりて、凡そ十三
目間、眠るものあり。その眠さむる時
は、蛾と共かり、まゆを破りて出づ。
此まゆより糸を取りて、絹になり、衣服など
造らる。かひに、もゝ蛾となりて、まゆ
を破れて出づるときは、糸々きれへに
ある故に、糸を取るには、蛾とあらざる
糸にさする異あり、糸

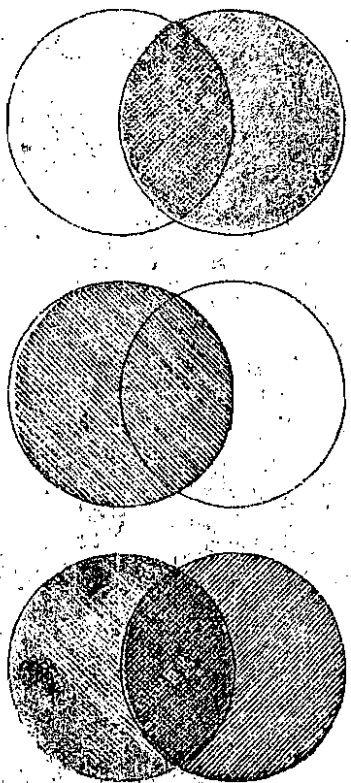
止る。取る。生糸は、我が國の産物中
に、甚だ大切なる物あり。

桑、蛾、絹、衣服、産、甚

赤第四課

おろし郎のおもひを染めたる話

母は、三郎に、繪具一はことおもひを
一あたへたり。繪具はこにて、赤、青、黄の三
色ありて、おもひは、紙にてきりたる、鳥



と、未だ言へば赤とを
まぜたり、故に其二色
をまぜたるに、一つの
も美く、一色を得たり。
今二郎の得たるハ、紫
と色をまぜり。母の
二郎は喜びて、母の
色をまぜ、曲と一つの色

來て、紫に染め付たり。とて、
問、得、橙、未、紫、獨樂、ハ、
の、米、もの、
五、餅、の、食、米、は、二、方、
に、て、る、もの、あり、
二、つ、と、ち、そ、ち、に、
に、て、る、もの、あり、
に、て、る、もの、あり、

米には、粳と糯とあり。粳は飯に炊き

糯ハ、きはめーとー、又もちにつく。

此等の米は、多く水田に作れる稲に
みのるものあり。

稲の種を蒔くところを苗代田と云ふ。

苗代田に種を蒔きて、其苗六七寸に
至りし時、之を本田にうつす、これを田
うきと云ふなり。

本田に植ゑし後

は、まばく草を

取りて、稲の成長

を助く。稲のは

の出でし後、水

を落して、またいに

かまゐすなり。

稲のは、十分まゆぐ一たる時は、之を刈り



四五日は、稲をきにて、はををかき落し、
あぐあひにてあひ、又たうみにかけて
實をかきおとせ分つ、この實を糊と
いふ。この糊をむらにひろげ、よく日
にはし、それをすりうすにてひき、ふん
びたうみにかけて、もみらるを去り、あぐ
あぐに米を得。

此米を、白にてつかふは、ぬかをさし、

はじめて飯に炊きて、食することを得る
あり。

粳 糯 炊 稻 苗 寸 植 草 糊

第七課

道長の話 一

昔花山天皇の御代に、道長と云へる人
ありけり。ある年、五月雨降りつきて、物
さびしき夜、人々と共に、天皇の御そば

尋常小學校讀本卷之四

目次

主竹の老人を助けし話

時

學のすゝめ

忠次郎の話

友のえらび方

麻

明治二十七年三月 文部省編輯局

尋常小學校讀本

教科用書

おぶ取 信高の妻の勇氣

千代松の話

桂 鳥蛤を食ふ話

老翁物語

事物の讀み方

菊

孝行なる盲人

千鼠とや又鼠

手紙の書き方

21 義家の學問に志したる話

月の日數

鹿の水鏡

ばう花

(二章)

(二章)

繪と圖

公園の地圖

伏の智慧

大坂の蛙と京都の蛙

神武天皇

紀元節の歌

(二三)

尋常小學讀本卷之四

第一課

お竹の老人を助け―話

道は雪にうつるれ風ははたへに透りて
寒さ甚ど強くゆきゝの人々は早く家に
歸りつゝなんと皆急ぎ足に歩めり。然る
に何えれけある一人の老人或る家の前
に立ち手も扇を持ちてうたひをうたひ

麻

子供の、もてあそぶ、扇の糸は、麻より造りたるものなり。夏の夜、蚊をふせぎて我等を心安く眠らるむるかやも、また麻よりおりたるものなり。汝等、麻といへる植物を見しことありや。麻は、眞直に育ち、其高さ七八尺にも、

麻には雄花の咲く

ものと雌花の

咲くものとあり。

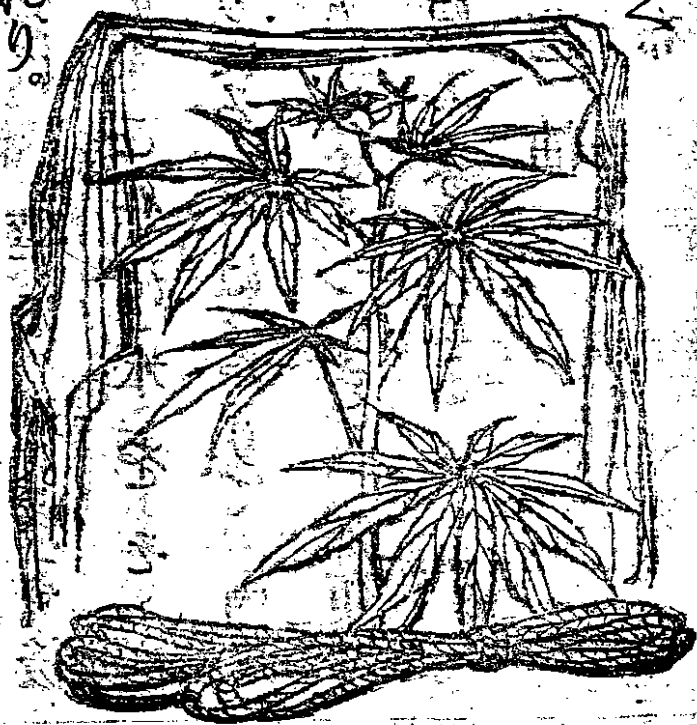
雄花は、うけ緑

をまひたる白色

にて、雌花は、

緑色の苞を被れり。

實多小きく、其色うす黒くしてこれより



油を煮たり、或ハ小鳥の煮と、また
 水の食品を煮たり。莖は、茹りたる後
 は、上りて、煮はく、これに水を加へ、
 其外皮の、くさりたるをばきとりて、内皮
 を煮と、芋より糸をつむぎて、麻布に
 おり、或ハ莖をばとち。

風、蚊、蠅、苞、油

莖、茹、布

第七課

取

昔、右のほくに、大なる瘤ある、ひどりの
 時、ありけり。或る日、山中にて、雨、風

吹あり、杉の木のうちに入

臥臥、はれ、待たせ、さかて、臥る中
 に、日、もくれば、かれは、歸る、を、も、たかて、
 木、と、波、を、夜、を、あか、せ、せり、

小學校教科用書

尋常小學讀本

明治二十年五月文部省編輯局

尋常小學讀本卷之四

目次

中竹の老人を助けし話

時

學のすゝめ

忠次郎の話

友のえび方

麻

おぶ取 信高の妻の勇氣

千代松の話

杜鵬

烏蛤を食ふ話

考へ物

書物の讀み方

菊の歌

菊

孝行なる盲人

子鼠とお又鼠

手紙の書き方

(二章)

義家の學問に志したる話

月の日數

鹿の水鏡

はうー花

繪と圖

公園の地圖

犬の智慧

大坂の蛙と京都の蛙

神武天皇

紀元節の歌

尋常小學讀本卷之四

第一課

お竹の老人を助けし話

道は雪にうつもれ、風ははたへに透りて、
寒さ甚と強く、ゆきゝの人々は早く家に
歸りつかんと、皆急ぎ足に歩めり。然る
に、あえれける一人の老人、或る家の前
に立ち、手も扇を持ちて、うたひをうたひ

尋常小學讀本

卷之四

三

文部省

省

尋常小學讀本卷之五

目次

學問の益

多のしぬ

菅原道真

狐と蟹とのかけひ

澁柿

腐りたる柿

東京書籍株式會社編輯局

東京書籍株式會社



東京書籍株式會社

雀のねたる

小児の悪戯

日本武尊

おもなる金属

正雄のあうむ

そひたけ

智慧の垣

仁徳天皇

家

蠅

塞翁が馬

深切の却て不深切とありたる話 (二章)

フリートリと大王の話

羊

魚釣

樟虫

(二章)

不正直の結果

良秀の話

勉強の少年

諺

小學校教科用書

三訂正

明治二十年五月文部省編輯局

尋常小學讀本卷之六

目次

太陽

日の旗

立身の宴會

あまたれ石を穿つ

らんどまーるの語

水の周遊

(一章)

尋常小學讀本

卷之六

文部省編輯局

二

火のゆへ

鎌倉権五郎景正の話

古戦場

正雄と少清との問答

菟道稚郎子の話

あるふれつと王の話

象

野中兼山のみぞけ

源平あそび

平清盛

ばんの木

鎌倉

獅子

べいん王の話

砂糖

後醍醐天皇

(二章)

(二章)

楠正成

るびんとてなるその昔話

(二章)

(三章)

(二章)

楠正行

尋常小學讀本卷之六

第一課

太陽

太陽は、日々光と熱とを吾等の世界に送るものなり。夜は、吾等が仕める土地、太陽に向はざる故に、その光と熱とを受くること能はば。吾等の世界より、太陽迄は、其へたゞ、甚だ遠く、凡そ三千八百萬里あり。今、假に人あり、太陽に

砂糖

砂糖は種々の植物より製するものとを得れども、我が國よりは重に甘蔗より取るなり。甘蔗は暖き地に適する故に、我が國の中にて、甘蔗を培養する國は、薩摩、沖繩、肥前及び南海道の國々と、伊勢、尾張、駿河の數國とに過ぎぬ。甘蔗は葉莖共に能くもろまゝに似て、其たけ一丈位迄成長す。其成長の時期をえかり、根もと

より之を刈り取り、葉を去りて束とし、之を甘蔗の搾り場に送り、石又は鐵よてつりたる搾り器械を以



て其汁を搾り取るあり。

其搾り汁に牡蠣灰少しを加へ釜に入れて煮白きあめの立つ時は能く注意して之をすくひ取りかは煮るゝと久しけれど汁を追々にさくある故其善き頃を計りて之を汲み出瓶に移して冷し置くあり。

汁は冷めるに従ひておひくにかたまり遂に白

下と云へる粗製の砂糖となる三盆無天光かと云

へる、此白下を猶精製せるものなり。

讃岐

の白砂糖薩摩の黒砂糖は我が國にて尤も有名

あり。

甘蔗適薩摩沖繩肥前

搾器械牡蠣灰釜讃岐

第二十五課

後醍醐天皇

をへて行く笠置の山をいでしより

小學校教科用書

尋常小學讀本

明治二十年五月文部省編輯局

尋常小學讀本卷之七

目次

我が國

祝へ我が國を

大椿の話

螢雪の功

森蘭丸の話

傲慢なる狼

豊臣秀吉

花

春色

立花道雪の話

空氣

蟻と鳩の話

蟻

豊臣秀吉

(111)

(11)

馬を獻じて蕪菁を得たり

虎

徳川家康

家康遺訓

江戸城

雨及び雪

琉球

葉

塚原卜傳の話

根

山田長正の話

地球

明治維新

君が御代

國王の巡幸

あふけむたふと

尋常小學讀本卷之七

第一課

我が國

汝等、我が國の地圖を見しことありや。我が國の

地形ハ、ほゞ半弓に似て、北東より南西に連り、四

箇の大島と、數多の小島とより成達り。

其中央に在りて、最も大なる者を本州と云ひ、其北

に在るを北海道と云ひ、西南に在るを九州と云

たまひ王を藩主となして華族と一たまひ後

藩を廢一沖繩縣と名つけり。

臺灣甘藷 小祿綿 芭蕉布 泡盛

鹽豚 廢人 兩屬 藩

第二十三課

葉

深緑、かげをかりて夏の灼つさを避けまむるを草木の茂り合ふまふるなり。吾等若一野山に遊

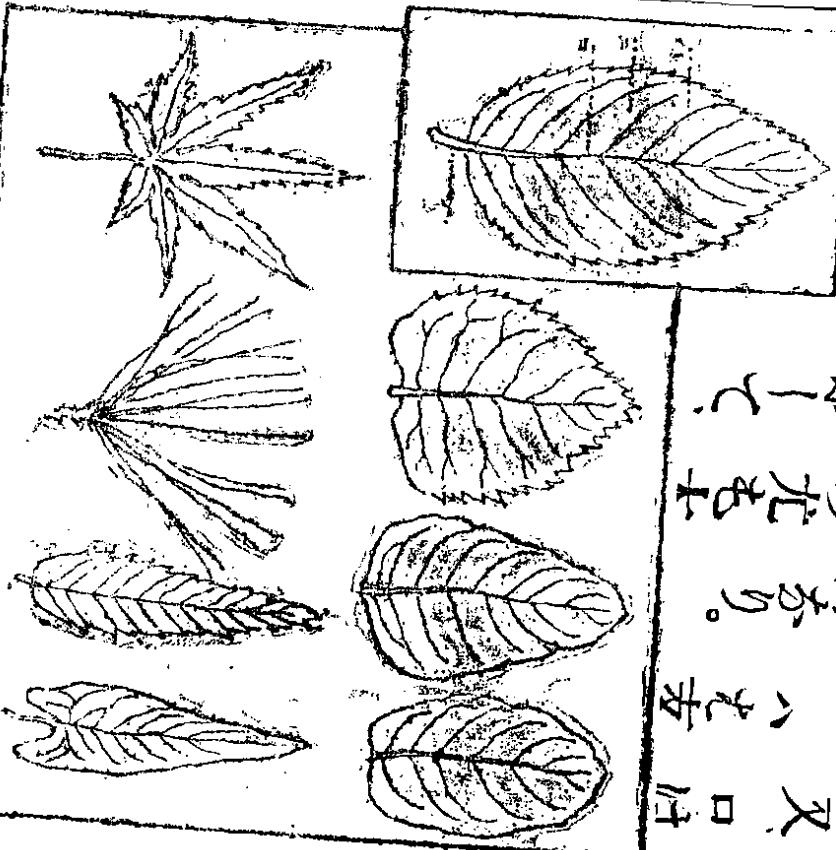
ひて能く其葉を見る時ハ種々の異なる形あるを知るべし。

葉には、林檎の葉の如く、橢圓形のもの尤も多し、椿、櫻梅などは、皆此形なり。又、橢圓形にて下部廣く殆ど卵のき形なるものあり、之を卵形と云ふ、茜の葉などは、即ち此形なり。

其他、又種々の形あり、桑の葉の如きものを心臟形と云ひ、くぬぎの葉の如きものを箭形と云ひ、桃

竹などの葉の如きものを披針形と云ひ、松杉などの葉の如きものを針形と云ひ、まき樅などの葉の如きものを線形と云ひ、楓の葉の如きものを掌狀と云ふ。此等の外、猶種々の形狀あれど、又試み一枚の櫻の葉を取りて、其部分をまらべて見れば、圖中の一は、葉柄にして、葉は、此を以て枝子附く、稀には、此葉柄なくして、直に枝に附く

ものあり。又、口は總管として、ハカキ管、二を葉片あり。葉片は、葉の尤も切かる部分として、其裏面には、數多の小孔を有して、吾



等の呼吸するが如く、空氣を呼吸するものなり。

深緑 橢圓形 茜 箭形 披針形 縱

楓 掌狀 葉柄 總管 支管 裏面

第二十四課

塚原卜傳の話

常陸の國に塚原卜傳と云ひて、劍術の名人ありけり。ある年、諸國を遊歴して、近江の國を過ぐる時、琵琶湖のあたりに舟に乗りたるに、同船の者六

七人あり。が其中に、一人の容貌甚だ恐ろしき武士ありて、「我ハ、廣き日本に並ぶ者なき、劍術の名人あるを誰にても望みと欲らむ、相手にせん」と、傍り人なきが如くほこりたり。

卜傳は、是こと聞かざるよりして、ぬむり居たるに、彼の武士は、横目にてにらみ、汝は、一本の刀を帯びながら、何故ぞ、我に一言の返答をもなさざるや」と語りたり。卜傳は、靜よ、我は、人に勝

舟の島につくや否や武士ハ陸に飛び上りて「い
ざ來れ」と身構へせしかバト傳は靜に刀を腕―
て之を船頭に渡し「一寸其棹を貸せ」と云ふふ
り早へ陸を一つきつゝよと見えしか舟は忽ち
はるか遙かたに開きたり。ト傳は手を打つて
「され我が無手勝流あるぞ」と笑ひしかば彼の武
士ははかみをあて殘念に思ひしかとせんか
たかくして一人島に残されたり。

ト傳 遊歷 琵琶 容貌 流義
無手勝流 我慢 棹 殘念

第二十五課

根

今、一個のかゝの實を取りて、之をまめりたる地に
蒔く時は數日の後、皮は破れて、其中より白き細
き物出づ可し。其下に回きて、だん／＼に地中
にのび行くものハ、根にして、上に回ひて、おひ

おひまのび、地面の上に出づる者は、され幹なり。

根と幹とは、共に植物の大切なる部分にして、根に

は二つのおもなる役目あり。一ハ、植物をまか

せ地につけて、其位置を保ち、風などに吹き倒さ

れざる用をなす、又一は、地中より植物の養となる

るべき液體を吸収して、それを幹葉におくるの

用を爲すなり。

根に二つの種類あり、單根及び複根と云ふ。單根

とは、牛房人參の如く、一個

の主となる可き大なる根

ありて、下端の尖りたるも

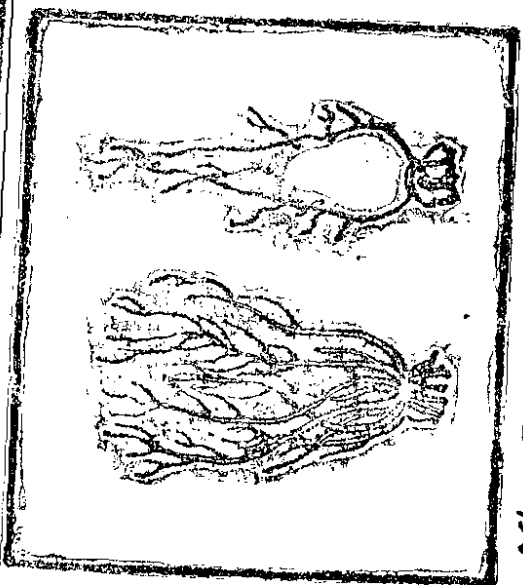
のを云ひ、複根とは、稻など

の如く主根なく、同大の根

の、數多あるものを云ふな

り。

根は、右の二類のみされど、往々、幹或は枝の、地中



に在るものを以て、根と誤るゝあり。あやゆ
ぬきなどの類の、地中にある木き部分ハ、幹に
ハ、多分たらいもささいもささいの類のハ、其枝
の、地中にあるものなれども、之を誤りて、根と思
ふ者甚だ多し。

根は、もと小根の外に、何物をもち生ぜざるものなれ
ども、幹或ハ枝の、地中にありて、根の如く見ゆる
ものには、芽或ハ葉芽の、存するものとあるにより

て、能く眞の根と區別するを得べし。

位置 液體 吸收 單根 複根

牛房 人參 葉芽 區別

第二十六課

山田長正の話

山田長正ハ、幼き時より、大なる望みを抱き、好みて
軍法を學びたり。されど、其頃ハ、徳川幕府の時
代にて、我が國よく治りて、戦争も無かりし時あり